

ISSN 0913-7785

人類働態学会 会報

第68号

1993年6月25日

事務局 〒216 川崎市宮前区菅生2丁目8番14号

(財) 労働科学研究所内

TEL (044) 977-2121

技の能、技の術

森 和夫 (職業能力開発大学校)

技の能、技の術

森 和夫（職業能力開発大学校）

職人の仕事

大学のキャンパスのはずれに漆の木が数本植わっている。知る人のみ知る漆の木だ。あのかぶれる漆である。学生の造形実習の中で使用していると聞く。いうまでもなく漆を専門にしている工芸作家でもある造形工学科の先生が植えたものである。

ずいぶん前のことになるが、この学会が研究会と呼ばれていた頃、研究会で漆作家の工房を訪ねたことがあった。工房見学の参加者は20人位であったと思う。訪問先は著名な漆作家である音丸先生のお宅である。私にとって東京本郷にあるそのお宅での見聞は今でも鮮烈な印象として残っている。二階の工房やガラス越しの庭、茶室での作品鑑賞と懇談など昨日のように思い出す事ができる。刃物で漆の層を百分の一ミリの精度で削るという作業もそうであるが、構想から木地づくり、塗りと乾燥、そして彫りと進んで行く工程の中にさまざまな技のありようを見たものだった。特に日課としてのデッサンのことは印象深い。3次元のものを2次元に置き換えるトレーニングをしているのだという。庭の木や草花のデッサンを欠かさず行うのである。3次元の立体物を作成するには物体の次元変換が要であるのだ。この日課の中には単に次元変換にとどまらず多くの「技の源」が含まれているに違いないと思った。職人の行為が合理的で美的にも優れたものであるのはその行為が科学的にも得心のゆくものであるからであらう。

事はすなわち理なり、理はすなわち事なり

黒田亮氏の「勘の研究」の中に登場する一刀齋先生剣法書に「事（わざ）はすなわち理（り）なり、

理はすなわち事なり。事のほかに理もなく、理を離れて事もなき」がある。「わざ」と「ことわり」は一体のものであることを剣法者の究極の状態として説明している。さらに記述は「事と理とは車の両輪、鳥の両翅の如し」とある。技と理論と考える場合もあれば技と心とも捉えられる。剣法の極意書には高度の運動や所作、哲学が入っているものと想像はしていたが誰もこんなにシンプルなものとは思わなかったのではないか。見方を変えて考えてみると技は単独では存在しないのだ。何らかの主体の意志や意図や心が背景にあって始めて成立するものといえる。また技は何らかの手段や手続きや理屈の根拠の上に成り立っている。技は主体の所産なのである。

このような眼で職人の書いた書物を広げるとさまざまな世界が見えるようになる。寿司職人、大工の棟梁、菓子職人……いずれも主体とものの接点で書かれている。

永遠のテーマ：学科と実技統合

一般化して言えば、技は主体が行うものである限りこれらの両面を職業能力として形成させなければ技能者の養成は進まないのである。職業技術教育では永遠のテーマともいべきものに「学科と実技の統合」問題がある。如何にしてできることとわかることを確立させるかが大きな問題なのである。この問題を追求してくると、もっと技について踏み込まざるを得ない。技術と技能をどう捉えるかがこの問題に先行する問題なのである。

技術と技能のかかわり

技能について考えてみよう。技能は「技の能（のう）」である。「能」には次のような意味が示されている。「①あたふ、あたう、②よくする、できる、うまくできる、じょうずにできる、したしむ、③よく、うまく、じょうずに、④はたらき、仕事をする力、物事をうまく処理する才能」とある。このように「能」には人間が何かの行為をできる状態を指し示している。つまり技能は「技の行為の実行の側面」を表しているのである。これに対して技術は「技の術（すべ）」である。この国語辞典で技能を「仕事などにあらわすうでまえ」としている。

一方、「術」には次のような意味がある。「①ワザ、学問、技芸など、②スベ、テダテ、手段、方法、しかた、③はかりごと、術計、謀略、術策、④道路、⑤神仙術のこと、方術、⑥心だて、心術」とある。

「術」は技の手段や方法のことを示している。つま

り「技術」は「技の手段・方法・手続きの側面」を表しているのである。この国語辞典では「①理論を実際に応用する手段やしきた、②自然を人間生活に都合のいいように加工する手段」としている。

技能も技術も技についての言葉である事は疑いようのないものであるとすれば先の「事と理」のことを考え合わせると以下のように推論できる。技術も技能も技について述べたもので、作業者の行為に着目すればそれは技能になり、作業の手段・方法に着目すれば技術になる。職人や熟練者を見て「技術と技能は作業者の中で一体化している」と言うが、これは当然の事であって技術無くして技能はなく、技能無くして技術はないのである。彼らの行為が技能であり、その方法や手段が技術なのである。

技能は作業者が持っている職業能力が機能した結果遂行する行為と考える事にしよう。単独ではなく複数の職業能力が輻輳して遂行しているのである。現代の生産と科学、技術、技能の三位一体

我国ではこの技術とは何かをめぐって論争が行われた。「技術は労働手段の体系である」と定義した労働手段体系説と「客観的法則性の意識的適用である」と定義する意識的適用説があった。これらは上の議論の中で相反するものであろうか。いずれも反するというよりも、その一面を拡大して投影しているように思える。

現代の生産活動は何らかの形で科学、技術、技能に支えられて展開しているのである。科学は生産の行為や生産の手段の中に反映され浸透している。技術は技能を記述し、精細に手続きとして一般化する時に見いだせるし、科学から導き出される妥当な手段・方法であることもある。技能が技術に裏打ちされて展開されることもあれば科学的な妥当性に支えられて運動したり生産したりすることもある。

技術革新下に生きる技能者・技術者

マイクロエレクトロニクス技術革新と呼ばれる技術革新が進み、さまざまな影響を我々は受けるようになった。その早さと広がりはいまだにない規模である。また、浸透に要する期間も長期にわたっている。現代の職人や技能者は単に技能さえ優れていればよいというものではない。先の科学、技術、技能が働いて始めて遂行できる職場が増えてきている。最先端の機械・装置であっても作業の個性への対応の判断は人間が下しているし、高度の熟練をも求めている。旧来の伝統的な機械・装置の作業も職業

能力としてこれらの三分野がなければならない。作業者が自覚しているといないとにかかわらず、現代の生産はそうように仕向けられているのであり、作業者はそうように振る舞っているのである。そう考

えるとき、現代に生きる技術者、技能者のこれからのありようがこれまでとは違った視点で問われていると言えないだろうか。